

# フランス語の語順の通時的変遷に関する覚書

Mémoire sur le changement diachronique de valeur positionnelle dans la langue française

浅野幸生  
Yukio ASANO

## 0.

これ迄ラテン語から近代フランス語に到る統辞面の変化は、自由な語順が固定化する過程とか、総合的語法から分析的語法への移行とか表現されてきた。このような変化が起こったことを事実と認めた上で、それを少し異った角度から眺め解釈してみたいというのが本論の目的であるが、ここでは特に、非人称構文を含む自動詞構文類を直接の対象にする。<sup>(1)</sup>

## 1. 非人称構文の沿革

現代フランス語には、「非人称ヴァリアント」<sup>(2)</sup>と呼ばれる他のロマンス諸語にすら見られない特殊な非人称表現が存在する。(ex. Il est arrivé deux hommes. VS. Deux hommes sont arrivés.) この表現は、「主語」であるところの *il* が具体的指向対象を持たないという理由から他の非人称表現と一緒に分類されることが多いが、筆者は発生的および構造的理由からこれを特殊なものとして扱うのが正当であると考える。

ラテン語の時代には非人称ヴァリアントは存在しなかったが、現在見られる他の非人称表現の多くに相当するものは見られた。一天然現象 (pluit, ninguit.....), 感情・感覚 (miseret, pudet.....), 状況 (licet, decet.....) など。これらの非人称は印欧語の非常に古い層にまで遡ることができ、文献によって確認しうる最も古い段階においては、主語として神が表出されていた。Skr. *devo versati* 《神が雨を降らせる》, Gr. Hom. .... Zeus ὁ ἀριστερός 《ゼウスが雨を降らせた》後にこれが表出されなくなり、主語無しで用いられたり、フランス語におけるように言語によっては代名詞がそれにとて代わるようになったのである。

非人称表現において *il* が確認される最初の文献は12世紀のものである。G. Hilty は12世紀のテクストの中から *il pleut.* 型の文例を11見つけている<sup>(4)</sup>が、そのうちの7例が *il* 無しで、4例が *il* 付で用いられている。彼はこの時代に *il* が任意についつかなかったりするのではなく、ある条件の元で省略されることを示している。<sup>(5)</sup> 実際古仏語の段階では、*il* は省略されることの方が多かったようだが、これが次第に定着し義務化していくのである。だが *il* の無い非人称は、16世紀でも Montaigne や Rabelais に見られ、17世紀になっても日常語で用いられたと言う。<sup>(6)</sup>

## 2. 語順と機能

*il* の添加が他の人称動詞表現からの類推であると言われているが、これが語順の固定化と平行して進んだことは何を意味するのだろうか。その前に語順の自由度とは何だろうか。

主語・動詞・補語から構成される発話の形は、理論的には以下の6通り考えられる。

(1) Sujet–Verbe–Complément

- (2) Sujet-complément-Verbe
- (3) Complément-Sujet-Verbe
- (4) Complément-Verbe-Sujet
- (5) Verbe-Sujet-Complément
- (6) Verbe-Complément-Sujet

現代語より遙かに語順が自由だと言われる古仏語では、この6つの形は全て現れる。ただ L. Foulet も証言するように、その中でも(1)と(4)の頻度が圧倒的に高い。<sup>(7)</sup>

(1)と(4)に使用が集中しているのは、この時代既に動詞を文中の二番目に置く傾向が確立されつつあったことを示している。<sup>(8)</sup> 少ぶ単純にこれら二形式をこの時代の「標準的な」語順とした場合、他の形式が話し手もしくは書き手一の気まぐれによって使用されたのか、それとも何か明確な動機をもって使用されたのかが問題となる。

A. Meillet は、古い時代の語順は統計的 syntaxique 価値ではなく表現的 expressive 価値を持ち、従ってこれは文法より修辞学の領域に属すると言う。<sup>(9)</sup> 確かにこれ迄しばしば、主語以外のある要素が文頭に置かれた場合それはその要素に対して注意を引くためであると言われることがあった。だが事実はそれ程単純ではなく、例えば最近のある研究の中でフランス語の絶対倒置文 (ex. Eclata la guerre.) においては先行の動詞よりもむしろ後続の主語に注意が集まることが指摘されている。<sup>(10)</sup> 確かに正常な語順を変えることによって文体的・感情的効果を生み出すようなことはどの言語でも行なわれるであろうが、その効果の度合は語順の変え方だけでなく言語によってもまちまちなのである。「例えば、スペイン語やイタリア語では強調上たいした違いもないのに語順が気ままに変わる、といった印象を人は抱く。」<sup>(11)</sup> 同じフランス語でも現代と中世では語順の変化の持つ意味が異り、古仏語では語順の許容度の高さゆえに、どの文型を用いてもさほど大きな違いはないのだろうか。

古仏語やラテン語における語順の自由さとは、ある文型が他の文型に代わってもそれによって引き起こされる発話の意味的機能的変化の度合が低いという意味であり、表現を換えて言えば、それぞれの文型の「対立度」が現代語に比べて希薄だということであろう。

### 3. 非人称ヴァリエントの起源

古仏語において非人称表現は現在よりも頻繁に用いられたし、<sup>(12)</sup> 非人称ヴァリエントに相当するものも存在した。ラテン語の段階では全く存在しなかったのだから、その発生の契機が問題となる。ただ古仏語におけるこの形式が現在のそれと異なるところは、後続名詞句が複数の時しばしば前の動詞も複数形になったことである。

*En cel pré avoit un rastelier ou il menjoient cent et cinquante toriaus. (La Queste del Saint Graal)*  
現在では名詞句の单複にかかわらず必ず单数形におかれる。この事実から古仏語においては後続名詞句が文の主語で、前の動詞がそれに一致しているように思われ易い。だが古仏語の代名詞 *il* は、現代語の *il* だけでなく複数形の *ils* をも兼ねていた。だからこの場合「*il*」の方に一致しているとも考えうるのである。

動詞が前の *il* よりもむしろ後続の名詞句に一致していると主張することが正当性を持つとすれば、それは前の *il* がしばしば省略されるという事実のためであろう。*il* が省略され動詞が後の名詞句と一致している文は、外見上「倒置文」と全く同じである。古仏語では補語の左方転位を伴わない倒置文が珍しくなかったため、この種の形式はむしろ倒置文とみなされるだろう。

今わかり易くするため、古仏語において共存した三形式を現代フランス語で表わしてみよう。

- (a) Arrivent deux amis.
- (b) Il (s) arrivent deux amis.
- (c) Il arrive deux amis.

(b), (c)はお互いに自由変異であり、(b)は il が省略されれば一事実しばしばそうなったのだが一倒置文(a)と表層構造上全く同一になるとすれば、より古い時代から存在した(a)のような倒置文が非人称ヴァリアントの原形であるように思える。

周知の如く、(b)はその後消滅し、(a)は現代フランス語において限られた使用範囲しか持たないながらもなんとか生き残り、(c)は《productif》<sup>13</sup>な形式として現在まで存続している。この時代においては(a)が安定した normal な語順の一つであるのに対し、頻度こそ高いが(b), (c)の間には動搖が見られる。この時代には(c)よりむしろ(b)の方が普通だったようだが、その後(b)が、形式上紛らわしい(a)との混合を避けるために消滅した—あるいは(c)に吸收された—と仮定すれば、その時期に既に倒置文と非人称ヴァリアントの間の「機能の分化」が始まっていたと考えられるかもしれない。頻度の高い(b)が低い方の(c)に吸收されただけに一層そう思えるのである。

いずれにせよ通時の観点から見ると、非人称ヴァリアントの前身は目的補語の欠除した倒置文で、これが何らかの理由—おそらくリズム、動詞を二番目に配置する傾向の定着、人称形からの類推など—によってその前に il という代名詞をとり、それが他の形式と異なる機能を持つに従って独立した形式となっていたのだろう。もしそうだとするとやはり、後続名詞の数に動詞を一致させる形の方がより古いことになる。

ところで非人称に il のついた理由はしばしば説明されることがあるが、前につく要素がなぜ il でなければならなかつたのかについて論じられたことは殆んど無いように思える。古仏語の段階で数ある非人称表現に遍く il が用いられるようになってくるわけだが、それぞれの場合の動機と時期が必ずしも一様でない可能性があることを指摘しておかねばならない。

例えば天候表現において、動詞が本来三人称単数になっている以上主語たる代名詞は三人称単数でなければならない。その当時の人々が pleut とか neige などと表現される現象に超自然的な力をどのくらい感じていたかについては知る由もないが、男性単数になったのはそれらの「行為」が女性よりも男性のイメージに合うといったような意味的の理由からか、あるいはラテン語の非人称動詞が中性単数に置かれることがあった<sup>14</sup>ので、中性代名詞を語源とする il が選ばれたのかもしれない。<sup>15</sup>

それに対しこの段階での非人称ヴァリアントの前身だった形は、動詞が単数だったり複数だったり安定しなかったので、il のような单複同形の代名詞の存在は好都合だったろう。ただ先にも少し触れたが、非人称ヴァリアントの il は元来複数だったのかもしれない。そうすると最初から他の非人称の il とは異っていたことになり、動機の相違うんぬんを言う前に無関係であった可能性すらある。この観点からすると、非人称ヴァリアントとそれ以外の非人称が「同じ il」をとるものとして同類となるのは、男性代名詞に単数 il—複数 ils の形式的対立が生じ、非人称ヴァリアントの動詞が単数形に統一されるのを待たなければならぬことになる。

従って同じ非人称と呼ばれていても、発生的に見れば元の形はもちろん、代名詞をとる動機も代名詞そのものも異質であると考えられる。現代語においても、天候など他の非人称表現には il 以外に ça, ce などの他の代名詞やゼロ形態なども可能なのに対し、非人称ヴァリアントでは必ず il でなければならないという事実がある。この時代に動詞を文頭に置く諸文型が、先に述べたような理由によりその前にある要素を補わなくてはならなくなり、その際 il が一種の passe-partout として活躍することになったのかもしれない。

#### 4. 自動詞構文の範列

現代語における非人称ヴァリアントの特殊性をもう少し詳しく見てみよう。以前からこの構文については用いられる動詞の制限が問題になってきた。G. Gougenheim のように「存在・到着・出発・誕生・死滅」といった意味カテゴリーの制限を設ける立場から、H. Bonnard のように「いかなる人称動詞も非人称構文をとりうる」と一切の制限を設けない立場まである。M. Hériaud は現代フランス語のテクストにおける広範な調査を行い、非人称ヴァリアントとして用いられた273の自動詞を確認している。彼自身も、どんな自動詞もこの構文に用いうるという結論に達しているが、この動詞の数はその結論を支えるに十分なものと言えるだろう。

彼のあげた273の動詞のリストを見て気がつくことが2つある。一つは、生起数が1～2回の動詞の数が多いということ。（1回が114、2回が34）もう一つは特定の動詞の頻度が際立って高いことで、高いから6つの動詞（être, rester, exister, venir, arriver, manquer）の生起数の合計が273個の総生起数に占める割合は72.5%にのぼる。

一番目の点で生起数が一回だけの動詞について考えてみると、これらの殆んどが本来的に使用頻度の低い珍しい動詞で、大辞典でも非人称としての語法・用例が記されていることはまず無い。このような動詞がこれだけ広範囲の資料の中でたった一回しか確認されていないとすれば、使用されたケースは事実上・話し手もしくは書き手によって初めて用いられたのに等しいことになる。その際、他の文型—主に人称形—が可能であるにもかかわらず敢えて非人称形を用いたとすれば、話し手には非人称形を用いる確かな動機があったと考えられる。初めての語法を使用するのは少なからず勇気の要ることなのでなんとなく用いることはないであろう。そしてこの事はよりも直さず、非人称構文が現代フランス語において独自の機能を持ち、常に新たな例を生み出す生産的パターンとして存在していることを意味する。

それでは特定の動詞が高頻度であることはどう考えられるだろう。venir, arriver などは本来的に頻度の高い動詞で、人称形でも一恐らく非人称よりずっと多く一用いられる。だが rester, exister, manquer, subsister などは、自動詞としては、人称形で用いられることが稀になってしまっている。頻繁に il reste..., il existe... という形で用いられることにより一種の慣用化 idiomatisation を起こし、もう一方の人称形が用いられなくなれば話し手は選択の動機を失う。だから非人称本来の機能は、むしろ頻度の低い、それゆえに積極的選択の結果として使用される動詞の方に顕著に現れていると考えられるのである。慣用化した非人称は競合者の欠陥と便利さのため使用頻度を増し、他方、唯一用例 hapax に代表される使用頻度の少ない動詞は、本来の機能を保っているため次第に使用範囲を拡げることになる。<sup>44</sup> 非人称形における動詞の生起数の不均一と分布の広さは、この二つの逆方向の傾向の存在によって説明される。

hapax

verbes à une haute fréquence



extension d'usage

idiomatisation

発話のある一点で「木の葉／散る」という意味内容が要求されている時、人称形 (Des feuilles tombent.) と非人称形 (Il tombent des feuilles.) が、あるいは限られた場合には絶対倒置文 (Tombent des feuilles.) も競合関係に入ってくる。また状況補語が加わった場合はそれを文頭に据えた倒置文もこれらに加わる。これらの文型は言語環境を共有し、配列という次元で対立しているので範列を構成していると考えることができる。もし話し手がある動機をもってこれらのうちの一つを選択し、その動機がその言語共同体の中で共通のものであれば、それぞれの文型が独自の機能を持っていることになるだろう。そしてこれ迄の考察が示す通り、現代フランス語

では、非人称形を始めとするこれらの文型の各々が他と区別されるための特徴を有しているのである。

## 5. 結び

既に観察したように、古仏語には現代フランス語に見られるこのような文型間の明白な対立は存在しなかった。いずれの段階にも主語、動詞、補語などは存在し、それによって構成される文型も存在するのだが、語順の持つ意味の違いが両者を同一平面上で比較することを無効にしてしまう。古仏語では主格と被制格の間に形態上の区別が存在し、これが語順の機能負担量を軽減し、その結果あらゆる文型が許容された。それが格語尾が消滅すると共に、その区別を語順が負担しなければならなくなり、次第に語順が固定されるようになった。そしてそうなって始めて、語順を変えることの効果が大きくなったのである。ここであげた配列という次元の範囲が成立するようになったのはこのような背景においてであり、また範囲の存在自体がそれを構成する各文型の機能の独立性を保障するのである。

### (注)

- (1) 本稿中の基本的な考えは、筆者が1988年3月に提出した東京外国语大学修士論文「非人称ヴァリアントの機能について」に現われている。
- (2) 「談話の非人称」とも呼ばれる。
- (3) 「……最古の例では主格としてかかる自然現象を支配する者と信ぜられていた神が表出されている。これはまた印欧語族に名詞に性があり、動詞には人称別がありながら、自ら行動をなし得ないものと考えられる物に対する特別な形がなく、物を表わす中性名詞に主格がなく、従って動作を行なう者は常に人あるいは擬人化されたものでなくてはならなかった事実によく一致する。」(高津, (p. 320～) 本文中の用例も本書から借用した。
- (4) p. 244～245.
- (5) 彼自身の言葉を借りれば、「もし文が補語で始まつていれば、名詞主語はいつも動詞の後におかれ、代名詞主語は殆んどの場合省略される。」(p. 246) これは Foulet が『le grand fait qui domine la construction médiévale』と呼んだ古仏語の倒置規則である。(p. 307)。
- (6) Grevisse, p. 601 現在でも話し言葉で省略されることがある。ex. Faut pas y penser!.
- (7) p. 37～44.
- (8) Harris (ch. 1 & 2) によれば、この傾向はラテン語の時代に既に見られたと言う。
- (9) p. 365.
- (10) 東郷・大木 (1986).
- (11) ポズナー, p. 185.
- (12) Ménard, p. 122.
- (13) Rivière, p. 289.
- (14) Foulet, p. 203.
- (15) 自動詞の受動相は完了分詞を中性単数形にする。ex. A criter pugnatum est.
- (16) ラテン語における中性の指示詞 illud が男性の illum と同じ il に変化した。
- (17) p. 140.
- (18) 再帰形の se passer も同様。
- (19) 非人称ヴァリアントの機能については浅野 (1989) を参照。
- (20) 人称形は「無標」の文型とも考えることもできる。

## 参考文献

- 朝倉季雄 (1975) : 「現代フランス語における *il+V+N* 型非人称構文」『中央大学90周年記念論文集』 p. 117~41.
- 東郷雄二・大木充 (1986) : 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」『フランス語学研究第20号』 p. 1~15.
- (1987) : 「非人称構文の談話機能について——倒置構文との比較をめぐって」『フランス語学研究第21号』 p. 1~19.
- 高津春繁 (1954) : 「印欧語比較文法」岩波全書。
- 浅野幸生 (1989) : 「非人称構文と文脈」東京外国语大学フランス科論集『フランボー』第16号, p. 55~65.
- R. ポズナー (1982) : 「ロマンス語入門」(風間喜代三, 長神悟訳: 大修館)
- Bally, Ch. (1950) : *Linguistique générale et linguistique française*, 2<sup>e</sup>édition, Berne, Francke.
- Blinkenberg, A. (1928) : *L'ordre des mots en français moderne*. Copenhague, Munksgaard.
- Bonnard, H. (1950) : *Grammaire française des lycées et collèges*.
- Foulet, L. (1930) : *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris, Champion.
- Gougenheim, G. (1938) : *Système grammatical de la langue française*, Paris, D'Artrey.
- Grevisse, M. (1975) : *Le Bon Usage*. Gembloux, Duculot.
- Harris, M. (1978) : *The Evolution of French Syntax, A comparative approach*. London, Longman.
- Hériaud, M. (1980) : *Le verbe impersonnel en français moderne*, 2 vol. Paris, Champion.
- Hilty, G. (1959) : " *Il* impersonnel, syntaxe historique et interprétation littéraire ", *Le français moderne* 27, p. 241~51.
- Meillet, A. (1937) : *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris.
- Rivière, N. (1979) : " Problème de l'intégration de l'impersonnel dans une théorie linguistique ", *Le français moderne* 47~4, p. 289~311.